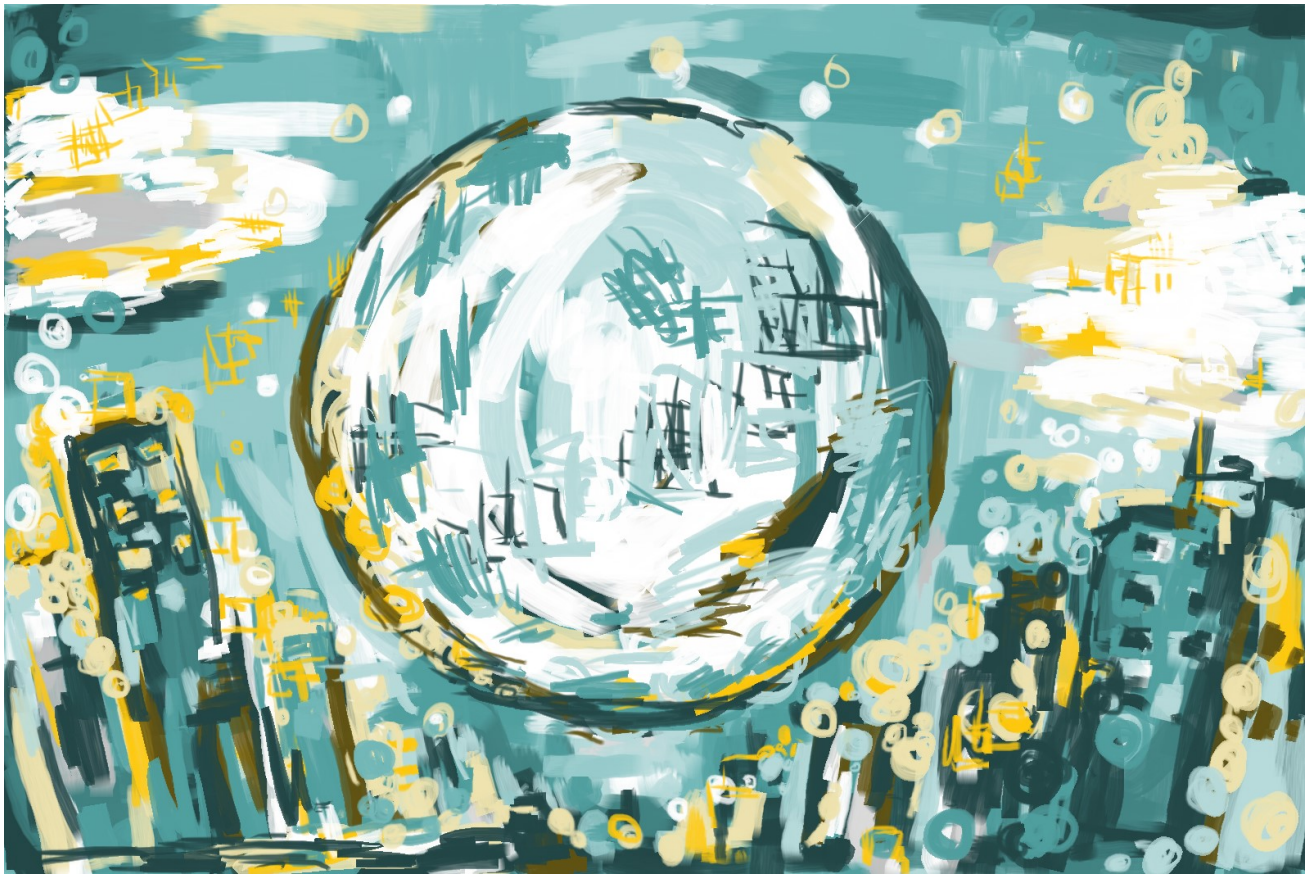
Printed 2019.0630 ISSN 2189-4957
Published by Asian Society of Human Services

# Total Rehabilitation Research

June 2019
7



Mamiko OTA
[Midnight Town]

Asian Society of Human Services

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.7.0_22
Total Rehabilitation Research, VOL.7 22-33

Original Articles

# 精神障害当事者における「自己理解の支援」の意味についての探索的研究
## ―テキストマイニングによる統合的分析―

前原 和明 1)

1) 障害者職業総合センター研究部門

＜Key-words＞
自己理解の支援，精神障害者，テキストマイニング

maebarakazuaki@gmail.com（前原 和明）

Total Rehabilitation Research, 2019, 7:22-33. © 2019 Asian Society of Human Services

Received
March 2, 2019

Revised
March 15, 2019

Accepted
April 9, 2019

Published
June 30, 2019

## Ⅰ．問題の所在及び目的

1983 年の「ILO 第 159 号条約」によると、職業リハビリテーション（以下、「職リハ」とする）とは、「障害者が適当な職業に就き、それを継続し、かつそれにおいて向上することができるようにすること及びそれにより障害者の社会への統合又は再統合を促進すること」と定義されている。また、我が国では「障害者の雇用の促進等に関する法律」により、職リハは「障害者に対して職業指導、職業訓練、職業紹介その他この法律に定める措置を講じ、その職業における自立を図ること」とされている。その上で職リハは、これらの活動にあるような個人に対するアプローチに留まらず、環境に対する介入や支援も含んだ幅広い実践的活動である（朝日，2012）。

近年、精神障害者の職業紹介件数及び就職件数が大幅に増加している（厚生労働省，2017）。その一方で、精神障害者の職場定着率は就職後 3 ヶ月時点で 69.9%、1 年時点で 49.4%と低い状況にある（高瀬・大石・西原，2017）。また、実際、障害者の雇用受入をしていない企業は、職場適応に関することを障害者雇用にあたっての懸念として挙げている（金，2016）。雇用受入をする企業の不安を解消し職場定着の向上を図っていくためにも、職リハに携わる支援者にはより質の高い支援を提供することが求められている。

職リハの支援場面において、職場における不適応状態を解消し支援を順調に進行させていくために必要とされているのが自己理解の支援である（日本職業リハビリテーション学会，2002）。職リハでは、個々人が自己・仕事・教育機会について職業に関連する情報を探索・統合できるように職業生活の文脈で支援対象障害者の自己理解を促すことが必要とされている（Roessler & Rubin，1992）。例えば、長沼（1997）は、病前と病後での状態のギャップ、失敗経験の蓄積、社会経験の乏しさ等によって生じた精神障害者本人の自己理解の不十分さ

が就業に対する自信の無さや実力以上の高望みといった課題に繋がっていると指摘している。また、小澤（2001）は、精神障害者の就業場面での情報伝達に関する調査において、支援者から精神障害者本人に対して伝達される疾病や作業特性に関する情報は精神障害者本人の自己理解を促進する上で重要であると指摘している。このように精神障害者の職リハにおいて本人の自己理解の促進を支援することの必要性が指摘されている。

職リハにおいて支援対象障害者の自己理解の促進を支援することの必要性が指摘されている一方で、その支援概念を体系的に整理した研究はほとんど無く、その多くは職リハに携わる支援者の実践報告に留まっている。そのため職リハに携わる支援者に実施することが求められる自己理解の支援の具体的な内容は不明確であり、職リハの支援場面において自己理解を促進するための支援を行うことの難しさがあると考えられる。よって、職リハの支援の質を高めていくためには、支援者が自己理解の支援を実施するために必要となる視点や意味を整理していくことは有用である。

前原・縄岡・織田ら（2018）は、職リハにおける自己理解の支援内容の明確化に向けた複数の研究を実施している。そして、職リハの支援者（障害者職業カウンセラー及び就業支援担当者）が実施する自己理解の支援行動を問う質問紙調査の結果、精神障害者（統合失調症及び気分障害）に対する自己理解の支援行動は「現状認識の促進（以下、認識促進）」、「実体験の提供（以下、実体験）」、「現状整理の依頼（以下、整理依頼）」、「情報収集機会の設定（以下、収集機会）」の４因子から構成されることを報告した（表 1）。

加えて、並行して研究が実施された精神障害当事者に対するインタビュー調査の結果、「生活リズムの取り戻し」、「就業に向けての現状理解」、「自信の再獲得」、「実体験を通じた現状把握」、「挑戦の支持」、「考えの整理と不安感の解消」、「体調変化に対する対処の検討」、「就業を通した視野の広がり」の８つの精神障害当事者の認識する支援の意味を報告した（表 2）。

このように先行する前原・縄岡・織田ら（2018）の調査では、「職リハの支援者の実施する自己理解の支援行動」と「支援対象者であった精神障害当事者の認識した支援の意味」が明らかとなった。しかし、「支援者が実施した自己理解の支援行動が、支援を受けた精神障害当事者においてどのような意味を持つのか」という支援行動と支援の意味の間の関連性についての分析は十分に行われておらず、関連性は不明確のままである。この関連性を明らかにすることは、職リハの支援者が自らの支援に対する説明責任を果たし、更には職リハの支援の質を高めていく上での視点として有用な情報になると考えられる。

そこで本研究では、先行する前原・縄岡・織田ら（2018）の調査結果を用い、未分析であった支援者の実施する自己理解の支援行動と支援対象者における支援の意味の関連性について検討する。

表１　各障害の因子構造

| | 項目 | 統合失調症 | 気分障害 |
|---|---|---|---|
| 1 | 様々な種類の作業訓練に挑戦してもらったり、職場実習等の様々な経験の機会を設定する | 実体験 | 実体験 |
| 2 | 結果だけに注目するのではなく、この結果に至るまでの過程の中身に注目する | 認識促進 | 認識促進 |
| 3 | 対象者が自分自身の課題を把握できるように、相談場面等でこれまで経験した就業の状況や就業する中で発生した困難な状況等について確認する | 認識促進 | 認識促進 |
| 4 | 支援者として、短所や課題を指摘するのではなく、対象者の強みや長所を伝える | 認識促進 | 認識促進 |
| 5 | 履歴書作成や面接練習等の就職活動に直結する支援を提供する | 実体験 | 実体験 |
| 6 | 支援者の把握したアセスメントや観察評価の結果を対象者の一つの側面として対象者に伝える | 実体験 | 整理依頼 |
| 7 | 他者と意見交換をすることのできるグループワークの場面を設定する | 収集機会 | 収集機会 |
| 8 | 相談場面等で過去と比較して変わったことやできるようになったことについて考えることを対象者に依頼する | 整理依頼 | 整理依頼 |
| 9 | 現在の生活状況の記録を対象者に依頼する | 収集機会 | 整理依頼 |
| 10 | 相談場面等で、これまでの支援の中での状況や結果を基に、これらが対象者にとってどのような意味を持っているかについて考えることを依頼する | 整理依頼 | 整理依頼 |
| 11 | 就業に向けた準備状況（職業準備性及び作業技能等の有無）を支援者から示す | 実体験 | 実体験 |
| 12 | 対象者に自分自身の課題を整理してもらうことを依頼する | 整理依頼 | 整理依頼 |
| 13 | 対象者が働くことについて考えるために、働く上で必要な知識を得るための講習を設定する | 収集機会 | 収集機会 |
| 14 | 現状を伝える際は、対象者の障害特性や理解の仕方等に配慮する | 認識促進 | 認識促進 |
| 15 | 失敗しても大丈夫と感じられるような安心できる環境を提供する | 認識促進 | 認識促進 |
| 16 | 対象者が支援の見通しを持てるように工夫する | 認識促進 | 認識促進 |
| 17 | 課題や結果を伝える際には、課題が発生したり、そのような結果が得られた具体的な場面で、即時に行う | 〈削除〉 | 実体験 |
| 18 | 対象者の認識や行動の変化が一度に大きく変わることを目指すのではなく、小さな変化が連なって変わっていくことを目指すような支援をする | 認識促進 | 認識促進 |
| 19 | 個別相談の機会を定期的に行う | 認識促進 | 認識促進 |
| 20 | 現状や課題の整理の相談場面では、支援者が文字や図等を用いて示す等の工夫をする | 整理依頼 | 実体験 |

因子１「認識促進」：現状認識の促進を図るための現状を伝達時の配慮、因子２「実体験」：作業や実習等の具体的な活動の提供、因子３「整理依頼」：現状整理に向けた振り返り等の対応の依頼、因子４「収集機会」：講習やグループワーク等の情報収集機会の設定

表 2　支援の意味

| 支援の意味 | 内容 |
|---|---|
| ①　生活リズムの取り戻し | 自らの生活リズムの構築及び維持に繋がっているとの語り |
| ②　就業に向けての現状理解 | 働くことを通じて改めて自分自身の現状について理解することができたとの語り |
| ③　自信の再獲得 | これまでの離職経験や生活の中で失ってきた自信を再獲得できたとの語り |
| ④　実体験を通じた現状把握 | 職場実習等の実体験を通して具体的に自分自身の現状を把握することができたとの語り |
| ⑤　挑戦の支持 | 自分自身の挑戦を支えてもらえたと感じたという語り |
| ⑥　考えの整理と不安感の解消 | 自分自身の考えを整理・就業する中での不安感を解消する等の手助けを得たとの語り |
| ⑦　体調変化に対する対処の検討 | 自らの体調変化に対する対処方法を検討することができたとの語り |
| ⑧　就業を通した視野の広がり | 自分自身の視野の広がりを得ることに繋がったとの語り |

## Ⅱ．方法

### 1. 研究方法

本研究では、前原・縄岡・織田ら（2018）で未分析であった「支援者の実施する自己理解の支援行動」と「支援対象者であった精神障害当事者の認識する支援の意味」の関連性を分析する。そのための分析方法としてテキストマイニングを用いて質的に分析する。分析には KH-Coder（Version：3.Alpha.11b）（樋口，2014）を用いた。KH-Coder の機能として、「探索的な分析」を行う第１段階の分析と「仮説設定と検証」を行う第２段階の分析がある。本研究では、この「仮説設定と検証」を行う第２段階の分析を行う。

### 2. 分析手続き

#### 1）分析データの作成

本研究では、前原・縄岡・織田ら（2018）で得られた就業中の精神障害者（統合失調症及び気分障害）3 名への各 60 分 1 回の半構造化インタビューの逐語データを用いる。図 1 のように前原・縄岡・織田ら（2018）での現象学的分析によって得られた「支援の意味」を外部変数として Microsoft Excel 上で、「支援の意味」の元になったローデータに関連付けた。これを KH-Coder で用いる分析データとした。

| | A | B | C |
|---|---|---|---|
| 1 | ローデータ | 支援の意味 | |
| 2 | 働く中で感じていることですが、仕事を | 生活リズムの取り戻し | |
| 3 | もともと、朝、4時ぐらいに寝たりといっ | 生活リズムの取り戻し | |
| 4 | （前職を離職する際には、）病院に通っ | 体調変化に対する対処の検討 | |
| 5 | （これまで短期間での離転職を繰り返し | 体調変化に対する対処の検討 | |
| 6 | （支援がなかったら、）すぐに体調も悪 | 体調変化に対する対処の検討 | |
| 7 | やはり、自分一人だと気づかない内に | 体調変化に対する対処の検討 | |
| 8 | 支援機関に通い始めた当初は、非常 | 挑戦の支持 | |
| 9 | （今の仕事は、）好きです。色々な人と | 挑戦の支持 | |
| 10 | 支援機関には、4時間で通所していま | 挑戦の支持 | |
| 11 | 支援機関で、当事者同士のグループ | 挑戦の支持 | |
| 12 | 以前は、一般雇用で働いていましたが | 挑戦の支持 | |
| 13 | 現在の仕事が接客業なので、（支援の | 挑戦の支持 | |
| 14 | （支援の中の訓練で、）接客の仕事は | 自信の再獲得 | |
| 15 | （支援を受けることで、）時間通り始ま | 自信の再獲得 | |
| 16 | （支援を受ける中では、）休まずに通所 | 自信の再獲得 | |
| 17 | 支援を受けて良かったことは、企業実 | 自信の再獲得 | |
| 18 | 企業実習は、実際に、他の一般の同 | 実体験を通じた現状把握 | |
| 19 | 企業実習では、日誌を書いていて、定 | 実体験を通じた現状把握 | |
| 20 | やはり、企業実習は、積極的にやった | 実体験を通じた現状把握 | |
| 21 | （自分の苦手なことについては、）何と | 実体験を通じた現状把握 | |
| 22 | （支援中の企業）実習を受けることで、 | 実体験を通じた現状把握 | |
| 23 | （仕事をする中で、）もっと勉強をしてお | 就業を通した視野の広がり | |
| 24 | （就職してからは、）周りの同僚のこと | 就業を通した視野の広がり | |
| 25 | 上司からは、「自分で気づいたことを、 | 考えの整理と不安感の解消 | |
| 26 | 困った時に、いつでも相談できるように | 考えの整理と不安感の解消 | |
| 27 | なるべく相談では、自分なりに解決法 | 考えの整理と不安感の解消 | |
| 28 | 支援を受けることで、自分を知ることが | 就業に向けての現状理解 | |
| 29 | （支援を受けて、）自分のできること、 | 就業に向けての現状理解 | |
| 30 | | | |
| 31 | | | |

図 1　分析データのデータセット（Microsoft Excel ファイル）

**2）支援行動の定義**

次にテキストマイニングにおける分析の視点として自己理解の支援行動を定義した。自己理解の支援行動としては、前原・縄岡・織田ら（2018）で得られた精神障害者に対する自己理解の支援行動の 4 因子を用いた。この各因子の支援行動に対して、操作的に KH-Coder の分析で使用する仮説コードを作成し、支援行動の定義とした。なお、仮説コードの作成手順は、各因子を構成する各質問項目文における言葉を取り上げ、重複を削除して各因子の特徴を示す仮説コードとした。なお、項目 17 は削除項目のため仮説コードを作成する際には使用しなかった。この仮説コードによる支援行動の定義は表 3 の通りである。

表 3　仮説コードによる支援行動の定義

| 因子名 | 仮説コード |
|---|---|
| 認識促進 | 結果 or 過程 or 中身 or 注目 or 困難 or 経験 or 短所 or 指摘 or 強み or 長所 or 特性 or 仕方 or 失敗 or 安心 or 環境 or 大丈夫 or 見通し or 小さな or 変化 or 個別 or 定期 |
| 実体験 | 訓練 or 実習 or 機会 or 様々or 種類 or 履歴書 or 面接 or 就職活動 or 準備 or 技能 |
| 整理依頼 | 過去 or 比較 or 意味 or 整理 |
| 収集機会 | 他者 or 意見 or 交換 or グループワーク or 知識 or 講習 or 設定 |

**3) KH-Coder によるテキストマイニング**

外部変数が関連付けられた分析データについて、仮説コードを用いて KH-Coder で分析した。分析には、出現パターンの似通ったもの（共起関係）を線で結んだ図から関係性を視覚的に理解することができる共起ネットワーク分析を用いた。

**4) 統合的解釈**

最後に、統合的解釈として、共起ネットワーク分析の結果図から質的に支援者の支援行動と精神障害当事者の認識する支援の意味を解釈した。

**3. 研究倫理**

障害者職業総合センター調査研究倫理委員会の承認を得た（受付 No.29 年度-01）。

## Ⅲ．結果及び考察

支援者の実施する自己理解の支援行動と精神障害当事者の認識した支援の意味の関連性を明らかにするために、支援の意味を外部変数として関連づけた分析データを自己理解の支援行動の仮説コードを用いて共起ネットワーク分析を行った。結果、図 2 の結果図を得ることができた。なお、図中の Coefficient は Jaccard 係数（語の共起数を各語の出現数及び共起数で割った割合）、Frequency は語の出現回数を指す。

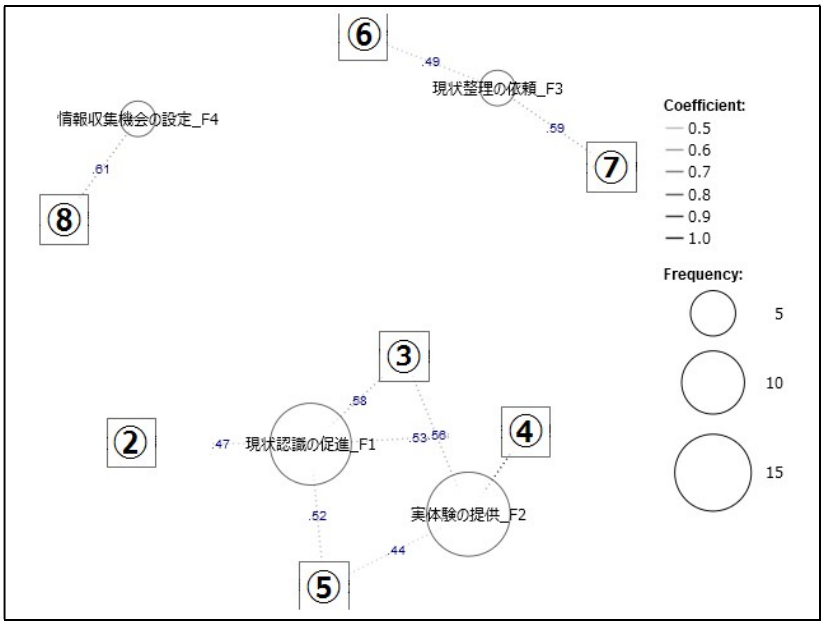



図 2　共起ネットワーク分析の結果図

まず、現状認識の促進を図るための現状を伝達時にプロセスを丁寧に伝えること強み等をフィードバックする等の「認識促進」の支援行動は、「②　就業に向けての現状理解」(Jaccard 係数:.42)、「③　自信の再獲得」(Jaccard 係数:.58)、「④　実体験を通じた現状把握」(Jaccard 係数：.53)、「⑤　挑戦の支持」（Jaccard 係数：.52）の支援の意味と共起した。

この共起した語りの例としては以下のようなものがあった。

- 実習を最後までやり遂げることができたということと、（実習は）夏の暑い日だったのですが、いろいろ工夫して挑戦する中で、色々と、一歩、立ち止まって考えて仕事に取り組むことができるようになったと感じています。

- 企業実習では、日誌を書いていて、定期的に支援者に（日誌を）見てもらいました。支援者に見てもらう際に、実習先の仕事内容や職務スケジュールを説明することで、実習についての振り返りができたように思います。

- 支援機関には、４時間で通所していました。なので、入職時は、４時間勤務から始めました。６時間に勤務時間を延ばす際は、会社からの要望もありましたが、自分自身で振り返ってみて、体力的にも大丈夫だと感じたので挑戦しました。

以上から「認識促進」の支援行動と共起した支援の意味として、支援の中で行った職場実習での実体験を通じて自分自身の現状理解が達成できたとの語りが見られた。よって、この共起関係を「自らの現状理解」と解釈した。

次に、具体的な作業支援や職場実習等の具体的な活動の機会を提供である「実体験」の支援行動は、「③　自信の再獲得」（Jaccard 係数：.56）、「④　実体験を通じた現状把握」（Jaccard 係数：1.00）、「⑤　挑戦の支持」（Jaccard 係数：.44）の支援の意味と共起した。

この共起した語りの例としては以下のようなものがあった。

- 支援機関で、当事者同士のグループワークの時間を持ちました。（このグループワークは、）就労とは関係の無い、むしろ、交流を深めることを目的にした場でしたが、そこでの体験を通して、もっと会話が上手くなりたいといった思いを持ちました。

- 企業実習は、実際に、他の一般の同僚の人と接することができて、体験として良かったです。また、長時間勤務することができるのかを確かめることができました。実際に、就職してみると、例えば、挨拶等、環境が変わるとしないことがあります。環境が変わるとやることが違うので、様々なことを体験できる企業実習は受けることができて良かったと思います。

以上から「実体験」の支援行動と共起した支援の意味として、支援で行ったグループワークや職場実習での経験から就業に向けた自信を再獲得することや様々な事柄に挑戦していきたいという思いを持てたとの語りが見られた。よって、この共起関係を「自信の再獲得と挑戦」と解釈した。

相談場面等で現状整理に向けた振り返り等の対応の行っていく「整理依頼」の支援行動は、「⑥　考えの整理と不安感の解消」（Jaccard 係数：.49）、「⑦　体調変化に対する対処の検討」（Jaccard 係数：.59）の支援の意味と共起した。

この共起した語りの例としては以下のようなものがあった。

- （これまで短期間での離転職を繰り返していましたが、）支援を開始して、体調が悪い時も、支援者が見ていてくれて、睡眠時間を表に整理していくとかして、調子が悪い時の睡眠状態に対する分析や助言をもらうことができて、体調の悪化を少なくすることができたと考えています。

- やはり、自分一人だと気づかない内に、体調が悪くなったりしていたということがありました。これまでも、それで、２～３回ぐらい入院もしています。支援を通して、（自分自身を振り返って）こんなことをしてるから、もしかしたら体調崩すかもしれないといった目盛りがはっきりしてきました。自分でなんとなくわかるようになってきたという感じで、自分自身の行動を調整できるようになってきたかなと思っています

以上から「整理依頼」の支援行動と共起した支援の意味として、支援により不安感や体調変化に対する対処法を確立することができたとの語りが見られた。よって、この共起関係を「対処法の確立」と解釈した。

最後に、就業に向けた情報を得たり、障害者同士で意見交換をする講習やグループワーク等の情報収集機会を設定する「収集機会」の支援行動は、「⑧　就業を通した視野の広がり」（Jaccard 係数：.61）の支援の意味と共起した。

この共起した語りの例としては以下のようなものがあった。

- （仕事をする中で、）もっと勉強をしておいたら良かったと思うことがあります。少なくとも、高卒程度の学力は持っておきたかったと思います。今の仕事では、基本的に、漢字（の知識）は必要です。職場では、モニター画面に表示される漢字を写せば、書くことはできるのですが、漢字がとっさに出てこない状況があります。

- （就職してからは、）周りの同僚のことを気にかけて、振る舞わないといけないといったことを考えるようになりました。なんていうかな、今までは、（自分自身の）視野が狭かったので、もっと職場全体のこと、人間関係も含めてですが、広く見るようにしていると思います。

以上から「収集機会」の支援行動と共起した支援の意味として、もっと様々なことを学びたいとの気持ちが持てた、就業場面で同僚のことを気にかけるようになったとの語りが見られた。よって、この共起関係を「視野の広がり」と解釈した。

そして、支援者の実施する支援行動と精神障害当事者の認識する支援の意味の関連性は図3のように整理することができた。

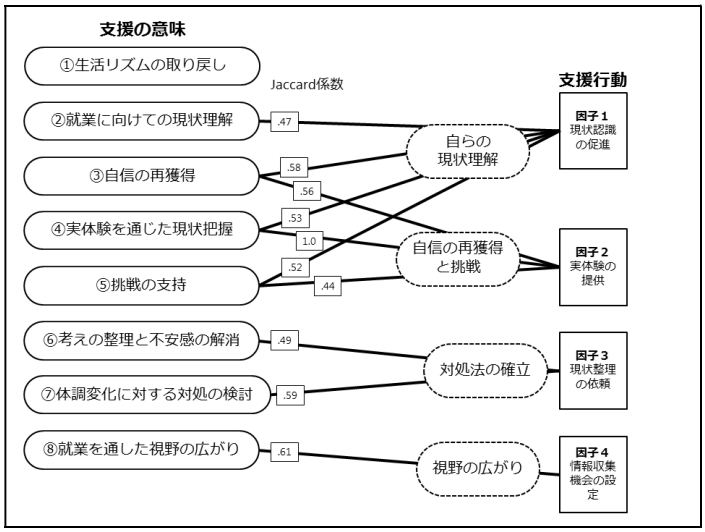



図 3　支援の意味テーマと支援行動の関連性

本研究で明らかになった自己理解の支援を実施することの意味は、「自らの現状理解」、「自信の再獲得と挑戦」、「対処法の確立」、「視野の広がり」の４つであった。これらの意味は、例えば、発達障害のある学生の自己理解を支援する意味とも異なる意味内容を持つことが確認でき（栗木・苅田，2017）、障害種別による違いがあると考えられる。特にこれらの意味は、いずれも精神障害者の自己理解の支援の先行研究において必要な観点として指摘されてきたものであり、精神障害者の自己理解の支援として特徴的な内容であると捉えることができる。

まず、「自らの現状理解」に関して、菅野（1988）は、就労支援に際して精神障害者は自らの障害及び障害程度を自覚しにくいため、就労への動機づけと並んで、対象者の現実認識（現実検討力）について適切に評価する必要があるとしている。そして、仮に就労に至らなかったとしても、このような支援がなされることによって、対象者が障害を抱えながらも生活することの自覚が促されると指摘している。また、大山（2006）は、精神科デイケアにおける精神障害者への就労支援事例を通じ、実際の職場等での体験就労を行うことによって自分自身を知り、障害受容へと繋げていくことが必要であると指摘している。

「自信の再獲得と挑戦」に関して、菅原（2004）は、精神障害者の事例研究における介入のポイントとして、支援対象者である精神障害者本人が自分自身のありのままを受け容れようとする力を強化し、自己価値や自尊心を高められるような自己理解の支援が必要であると指摘している。また、高田・木下・中野ら（2011）は、就労支援場面におけるロールレタリング技法の導入効果について検討を行い、ロールレタリングの自己と他者の両者の視点に立つという特徴に基づき自尊心を維持しながら物事を検討できるように支援対象者である精神障害者本人に働きかけ、現実的自己への気づきと就労場面における自己イメージ（自己理解）を促進させることが必要と指摘としている。

「対処法の確立」に関して、西谷（2000）は、精神障害者小規模作業所「パイ焼き窯」での実践における介入の視点として、支援対象者である精神障害者本人に体調や能力に応じた作業時間の達成目標を設定し、この目標をクリアするための生活リズムや服薬管理等の自己認識を促していくための自己理解の支援を行っていると報告している。また、宮城・豊里・古謝ら（2009）は、統合失調症者に対する就労支援プログラムの効果検証の研究を考察する

中で、支援プログラムにおける就労に向けた現実的・実践的な支援が精神障害を持つ患者の日常生活や円滑な対人関係の構築、自己理解の促進に繋がったと報告している。

「視野の広がり」に関して、尾崎・伊藤・中川（1997）は、精神障害者は職業人としての自己を同定するための基礎的な経験が不足していることから、これを補うための中間的就労場面が必要であると指摘している。山岡（1998）は、精神障害者は青年期に発症したが故に自我が未成熟であるため、作業や評価等の介入行動を通して自身が有する課題を客観視することが必要と指摘している。また、畑田（2004）は、精神科デイケアでのグループワークを中心とした介入の実践報告を通して、支援対象者である精神障害者がアイデンティティを取り戻すことを支援することが必要であると報告している。

以上のように、職リハにおける自己理解の支援は、支援対象者である精神障害当事者の就業に向けた現状整理と対処法の確立、そして、自信の再獲得や視野の広がりといった状態に繋がることが示唆された。

職リハにおいて自己理解を支援することは、支援対象者のエンパワーメントに繋がると言われている（Breeding, 2008）。エンパワーメントとは、自分自身の生活や職業に関する様々な事柄を自らがコントロールしていく力のことである。本研究では、精神障害者に対する自己理解の支援におけるエンパワーメントの具体的な内容が明らかになったと考えられる。この意味を職リハ支援者が認識することは、支援者が自らの支援の説明責任を果たすことができる。これは、支援対象者である精神障害者本人と協働した支援を展開することに繋がると考えられ、支援をより質の高いものとしていくことができると考えられる。

## Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究では、支援対象者にとっての自己理解の支援の意味と支援者の実施する自己理解の支援行動の関連性について質的に検討した。結果、実践における指針となる自己理解の支援の意味が示唆された。本研究は、支援対象者の語りのデータ数が十分でない中での探索的な検討に留まっている。よって、今後の課題としては、本研究から得られた支援の意味について、支援対象者の更なる語りのデータを収集することや事例研究を通して詳細な分析をしていくことが必要である。

## 付記

本研究は、障害者職業総合センター「職業リハビリテーション場面における自己理解を促進するための支援に関する研究」（調査研究報告書 No.140）の一部データを見直し、新たに分析したものである。

## 文献

1) 朝日雅也(2012) 職業リハビリテーションとは何か. 日本職業リハビリテーション学会(編), 職業リハビリテーションの基礎と実践. 中央法規出版, 2-13.
2) 厚生労働省(2017) 平成 28 年度・障害者の職業紹介状況等.
3) 高瀬健一・大石甲・西原和世(2017) 障害者の就業状況等に関する調査研究（調査研究報告 No.137）. 障害者職業総合センター.
4) 金紋廷(2016) 企業の障害者雇用実態と課題に関する研究～企業の障害者雇用実態調査を中心に～. *Total Rehabilitation Research*, 3, 28-45. doi: 10.20744/trr.3.0_28
5) 日本職業リハビリテーション学会 (2002) 職リハ用語集 第 2 版. 日本職業リハビリテーション学会.
6) Roessler RT & Rubin SE(1992) Case Management and Rehabilitation Counseling 2nd ed. PRo-ed, Texas.
7) 長沼敦昌(1997) 精神障害者が抱える課題の経時的把握－精神障害者授産施設の指導員と PSW が利用者と接する視点から－. 職業リハビリテーション, 10, 47-54.
8) 小澤昭彦 (2001) 精神障害者の雇用支援における個人情報伝達. 職業リハビリテーション, 14, 9-16.
9) 前原和明・縄岡好晴・織田靖史・松浦隆信・新倉正之・櫻井照美ら(2018) 職業リハビリテーション場面における自己理解を促進するための支援に関する研究（調査研究報告書 No.140）. 障害者職業総合センター.
10) 樋口耕一(2014) 社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.
11) 桒木裕貴・苅田知則(2017) 発達障害のある高校生・大学生の自己理解、進路選択の支援に関する文献調査. *J of Inclusive Education*, 3, 38-49. doi: 10.20744/incleedu.3.0_38
12) 菅野望(1988) 精神障害者の就労援助システム－川崎市リハビリテーション医療センターにおける実践活動から－. 職業リハビリテーション, 2, 63-70.
13) 大山勉(2006) 精神障害者リハビリテーションにおける回復過程と支援のあり方－精神科デイケアを利用し就労した２事例を通しての考察－. 職業リハビリテーション, 20(1), 23-31.
14) 菅原小夜子(2004) 精神障害者が自己実現を目指す過程を通してソーシャルワーカーのかかわりを考察する. 榛原総合病院学術雑誌, 1(1), 56-61.
15) 高田美子・木下隆志・中野美智子・田中響・堤かおり(2011) 精神障害者の就労支援 ロールレタリングを導入した有効性の検証. 医学と生物学, 155(11), 756-759.
16) 西谷久美子(2000) 豊かな福祉的就労の場づくりを目指して－精神障害者小規模作業所「パイ焼き窯」の試み－. 総合リハビリテーション, 28(7), 631-636.
17) 宮城哲哉・豊里竹彦・古謝安子・與古田孝夫(2009) 統合失調症患者の社会復帰促進に向けた就労支援プログラムの実証的研究. 琉球医学誌, 28(3-4), 35-42.
18) 尾崎幸恵・伊藤真人・中川正俊(1997) 精神障害者の中間的就労場面の役割－川崎リハの「保護就労」での離職者の調査から－. 職業リハビリテーション, 10, 9-16.
19) 畑田早苗(2004) 歌を通した人生ドラマへのアプローチ～精神科デイケアにおける対象者のアイデンティティの確立に向けて～. 土佐リハビリテーションジャーナル, 3, 17-24.
20) 山岡由美(1998) 精神障害をもつ人々の一般就労をすすめるための考察－共同作業所における就労援助を通じて－. 職業リハビリテーション, 11, 1-8.
21) Breeding RR(2008) Empowerment as a function of contextual self-understanding: The effect of work interest profiling on career decision self-efficacy and work locus of control. *Rehabilitation Counseling Bulletin*, 51(2), 96-106.

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.7.0_22
Total Rehabilitation Research, VOL.7 22-33

Original Articles

# Research on the Meaning of Support for Promotion of Self–understanding for Persons with Psychiatric Disorder at Vocational Rehabilitation;

Integrative Analysis with Text-maining

Kazuaki MAEBARA [1)]

1) National Institute of Vocational Rehabilitation

## ABSTRACT

Support for self-understanding has been recognized as an important support activities in vocational rehabilitation. In this study, in order to clarify meanings of support for self-understanding, I analyzed the relationship of support activities for self-understanding and client's meaning about spports. As the results of analysis, I got the 4 meanings of support for self-understanding; "to understand own current situation" "to gain self-confidence and make challenges" "to obtain the coping skills" "to obtain broad perspectives" The results are expected to be utilized as a hint or guidance for institutions to make supporting programs.

＜Key-words＞
support of self-understanding, psychiatric disorder, text-mining

maebarakazuaki@gmail.com（Kazuaki MAEBARA）

Received
March 2, 2019

Revised
March 15, 2019

Accepted
April 9, 2019

Published
June 30, 2019

Total Rehabilitation Research, 2019, 7:22-33. © 2019 Asian Society of Human Services

# Total Rehabilitation Research

## EDITORIAL BOARD


### EDITOR-IN-CHIEF

Masahiro KOHZUKI Tohoku University (Japan)

### EXECTIVE EDITORS

Changwan HAN University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA
University of the Ryukyus (Japan)

Daisuke ITO
Tohoku Medical Megabank Organization (Japan)

Eonji KIM
Miyagigakuin Women's University (Japan)

Giyong YANG
Pukyong National University (Korea)

Haejin KWON
University of Miyazaki (Japan)

Hitomi KATAOKA
Yamagata University (Japan)

Hyunuk SHIN
Jeonju University (Korea)

Jin KIM
Choonhae College of Health Sciences (Korea)

Kyoko TAGAMI
Aichi Prefectural University (Japan)

Makoto NAGASAKA
KKR Tohoku Kosai Hospital (Japan)

Masami YOKOGAWA
Kanazawa University (Japan)

Megumi KODAIRA
International University of Health and Welfare Graduate School (Japan)

Minji KIM
National Center for Geriatrics and Gerontoligy (Japan)

Misa MIURA
Tsukuba University of Technology (Japan)

Moonjung KIM
Korea Labor Force Development Institute for the aged (Korea)

Shuko SAIKI
Tohoku Fukushi University (Japan)

Suguru HARADA
Tohoku University (Japan)

Takayuki KAWAMURA
Tohoku Fukushi University (Japan)

Yoko GOTO
Sapporo Medical University (Japan)

Yongdeug KIM
Sung Kong Hoe University (Korea)

Yoshiko OGAWA
Teikyo University (Japan)

Youngaa RYOO
National Assembly Research Service: NARS (Korea)

Yuichiro HARUNA
National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)

Yuko SAKAMOTO
Fukushima Medical University (Japan)

Yuko SASAKI
Sendai Shirayuri Women's College (Japan)

### EDITORIAL STAFF
### EDITORIAL ASSISTANTS

Mamiko OTA Tohoku University / University of the Ryukyus (Japan)

Sakurako YONEMIZU University of the Ryukyus (Japan)

as of April 1, 2018



# Total Rehabilitation Research

VOL.7 June 2019



© 2019 Asian Society of Human Services



Presidents | Masahiro KOHZUKI & Sunwoo LEE

Publisher | Asian Society of Human Services
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, 903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production | Asian Society of Human Services Press
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, 903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Total Rehabilitation Research
VOL.7 June 2019

# CONTENTS

## Original Articles

Communication Gaps in Interprofessional Collaboration between Medical and Welfare Professionals

Miki ARAZOE 1

Research on the Meaning of Support for Promotion of Self-understanding for Persons with Psychiatric Disorder at Vocational Rehabilitation;
Integrative Analysis with Text-maining

Kazuaki MAEBARA 22

Development of Questionnaires for High-School Students and Adults Version of Scale for Coordinate Contiguous Career (Scale $C^3$);
Focusing on Verification of Construct Validity Using Structural Equation Modeling

Changwan HAN 34

Influences of Depression and Self-esteem on the Social Function of Autobiographical Memory

Kyoko TAGAMI 45

## Review Article

Basic Study for the Development of the Teaching Method based on the Relationship between Psychology, Physiology and Pathology of Children with Health Impairment

Haruna TERUYA et al. 61

## Short Papers

Developing an ICT-based System to Support Care-dependent Older Persons to Continue to Live in Their Own Homes;
User Interface Evaluation

Kazutoshi FURUKAWA et al. 70

Basic Study for Development of Assessment INDEX of Psychology, Physiology and Pathology for Intellectual Disability Children;
From Point of Change of Diagnostic Criteria and the Definition of the Concept of Adaptive Behavior

Mamiko OTA et al. 83

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan